原著

乗馬会に参加した子どもの絵は乗馬体験を反映しているか
―定型発達児，自閉症児，知的障害児の比較から考える描画分析の可能性―

柿沼美紀 *・野中香緒里・野瀬　出

日本獣医生命科学大学　比較発達心理学教室

（平成 25 年 1 月 25 日受付 / 平成 25 年 3 月 4 日受理）

Drawing horses after horseback riding: how do children with PDD and MR express their experience with the horses?

Kakinuma Miki*, Nonaka Kaori and Nose Izuru

Laboratory of comparative developmental psychology, Nippon veterinary and life science university

(Received January 25, 2013/Accepted March 4, 2013)

Abstract : Effects of horse riding experience for children could be difficult to evaluate for their limited ability to express their experience verbally. Children's drawings can be used to evaluate the psychological states or cognitive development as in Draw-a-man-test (Goodenough, 1926). Drawings by typically developing children (TD), those with pervasive developmental disorder (PDD) and those with mental retardation (MR) were compared for creating a developmental scale of drawing a horse for measuring the children's understanding of riding or interacting with horses.

A sample of 150 drawings of horses drawn over time were (51 TD, 54 PDD and 45 MR) collected at 6 horse riding events held at a university in Tokyo, Japan. The age ranges were 4-12 for TD, 6-18 for PDD and 8-17 for MR. Children were asked to draw a horse and the child after riding the horse. Drawings were analyzed for indication of names of the horse, child herself and the items suggesting the riding experiences such as the saddle or the helmet.

Analysis suggests that all TD, PDD and MR were similar in drawing style of the riding experiences. Drawings by PDD or MR were less complex, but basic construct of the drawings were similar to TD. Some PDD were even able to express the feelings of the horse while some drawing styles remained the same over the years.

The analysis also reveals that children can express their horseback riding experience by drawing as early as 4 years old.

Key words : PDD, horseback riding, drawing

J. Anim. Edu. Ther. 4: 1-8, 2013

はじめに

子どもを対象として動物を介在させた活動や教育は増えているが，客観的な評価をまとめた研究は少ない。その理由として，統制群を設けての比較が難しいこと，また言語表出の限られた子どもを対象に質問紙調査が実施できないこと，生理的データ収集の困難さなどが上げられる。心理学では言葉や文字での表現が限られている幼児を対象に古くから描画による検査が行われてきた（DAM グッドイナフ人物画知能検査，あるいは Koch のバウムテスト―樹木画による人格診断法―など）。

本研究では，動物を介在させたプログラムの評価尺度としての描画の有効性について検討した。また，動物介在活動や動物介在療法の対象となる広汎性発達障害児と知的発達障害児の描画を定型発達児のものと比較し，動物が介在している体験を子どもがどのように捉えているかの検討も試みた。具体的には単発型の乗馬会に参加した子どもを対象に「馬と自分」という

* 連絡先：kakinuma-miki@nvlu.ac.jp（〒 180-8602 東京都武蔵野市境南町 1-7-1）

テーマで絵を描いてもらい，それを分析した。

評価の方法と問題点

動物介在教育における統制条件を用いた研究としてはKotrschal and Ortbauer（2003）のイヌを教室に導入した研究がある。ここでは，教室における子どもの状態を，「通常の状態（イヌがいない）の１ヶ月間」と「イヌが教室にいた１ヶ月間」を比較したもので，イヌがいた１ヶ月間では子どもの攻撃性や多動が減少している。動物介在教育の可能性を示した初期の重要な研究ではあるが，この実験デザインではその変化がイヌの存在によるものか，あるいは子どもたちがクラスに馴染んできたためか，などの特定は難しい。

このような順序の影響を排除し，統制群を設定した例としては，大人を対象にした乗馬療法の効果の研究がある（倉恒他 2011）。ここでは統制群は騎乗のかわりにドラム缶にまたがり，生理的データを収集している。ただし，幼児を対象に同様の統制群を設けた報告はまだない。また，騎乗前と騎乗直後，休息後に騎乗者の唾液中アミラーゼの活性を測定し，聞き取りによる気分の変化についての検討がなされている。（内山他 2012）。子どもや障害者の場合，唾液の採取は何度か練習をすれば可能であるが，気分の聞き取りによるデータの収集が難しい。唾液中コルチゾールの分析は自閉症児を対象にした研究で報告されているが，これは一定期間動物と生活するなど，継続的な関わりの中で見られる変化を測定している（Viaua et al 2010）。

近年，非侵襲的な方法で生理的データの収集が可能になってきており，動物介在療法の効果測定方法として今後研究報告が増えると考えられる。ただし，血圧，心拍，体温，唾液中アミラーゼ活性などの生理反応のデータ収集は子どもの場合，拒否や抵抗感，違和感などが生じる可能性に加え，保護者の同意を得にくい場合もあり，導入が進んでいない。また，動物介在教育においては，より長期的な変化を対象としているため，生理的指標が適切な指標となるとは限らない。動物介在活動のような単発あるいは短時間の関わりにおける変化を見る方法としても適さない場合が少なくない。

乗馬療法や動物介在活動の評価にしばしば用いられるPOMSや子どもの自尊心尺度など質問紙型の調査方法は，言語能力が限定されている幼児を対象にしての実施は困難である。就学後は，作文分析を通して子どもの気分の変化，あるいは動物介在教育，愛護教育，動物介在活動の評価の手段とすることが可能であり，小学１年生でも体験したことを作文で表現できることが報告されている（伊澤他 2012；Matoba and Kakinuma 2009）。しかし，文字を習う前の小学校以前の子どもや動物介在療法や動物介在教育の対象となる自閉症児，知的障害児の反応を分析する手段としては用いることが難しい。

心理学の分野では子どもの描画の研究の歴史は長く（Luquet 1927），子どもの知的発達や情緒，性格の測定を目的として描画の分析が行われてきた。一般的に人物画は子どもの知的水準（Cox 1992）や言語発達（山形 1999）と連動していると指摘されている。DAMグッドイナフ人物画知能検査，あるいはKochのバウムテスト―樹木画による人格診断法―などは安定した尺度として幼児にも用いられている。幼児の知能検査として広く用いられているビネー式知能検査では３歳児を対象に，動物の絵を完成させる課題がある。３歳の段階で，部分的に欠落した動物の絵を見せられ，それが何であるか認識し，足りない部分を書き加えられるという前提に基づいている。

発達心理学者のハワード・ガードナーは自分の子どもの描画の発達的変化を事例研究として報告している（Gardner 1980）。その中で，娘が乗馬体験後に馬の絵を多く描くようになった要因として「彼女自身の馬との直接的体験の産物であった」と述べている。そして，「農場の旅行から帰ってまもなく，ケイは単純な図式の馬を描き」，２ヶ月後には「その夏に乗った馬を２頭描いた」さらには，「前年の夏のある日に馬に乗った楽しい経験を思い出した」と記述している。このように，乗馬体験の絵や話は，家族にとっても場面の特定が容易であり，非日常的，かつ刺激的な体験が子どもに与えた影響の大きさが伺える。

人物画の発達に関する研究は多いが，動物の絵に関する研究は限られている。発達初期の人物画と動物の絵は似ており，動物の絵も人物画に沿った形で発達していると考えられる（Cox 1992; Silk and Thomas 1986）。子どもが描く動物に関する調査では，年少から小学校３年の子どもに好きな動物を描かせると，最も出現頻度の高かった動物はウサギ，その次にイヌ，ネコであった（荻野他 1989）。一般的な絵として描かれることの少ない馬の絵は，子どもの特定の経験を表していると判断しやすく，その表現方法から，子どもの受けた印象や，馬との関係性などを推察できる可能性もある。

子どもを対象とした乗馬会や乗馬療法は増えつつある。その普及及びより効果的なプログラムの作成のためにも，子どもたちの状態を量的に評価することが求められる。乗馬体験の絵は簡易で的確に子どもの状況を把握するための尺度として用いることが可能であると考えられる。ここでは，尺度化へ向けての基礎的なデータベース作成の一貫として，乗馬体験を描いた絵を分析した。

具体的には，単発型乗馬会を経験した子どもの描画を通して，子どもが自らの体験を表現できるか，またどの程度できるかの検討を試みた。作文同様，その適応は限定的ながらも分析方法の開発や発達の尺度化は動物介在活動，教育，療法の評価の一手段としての可能性を含んでいる。また，言葉の遅れが見られる自閉症児や知的障害の子どもたちが描画で乗馬体験を表現できるか検討した。特に自閉症児が乗馬体験を絵にできれば，その影響や，内面の発達を測定する手段の一つとなりうる。

本研究では，乗馬会に事前登録して参加した自閉症児，知的障害児が騎乗前及び後に描いた絵の中で，馬が描かれているものを分析対象とした。統制群として参加者の兄弟及び当日参加した定型発達児の絵を用いた。

方法

対象

日本獣医生命科学大学では，1997 年より学生が主体になり，大学の協力のもと，動物介在活動の一環として地域の子どもを対象に「障害者乗馬会（以下，乗馬会)」を開催してきた。対象は主として障害児であるが，その家族及び近隣の子どもも参加できる。馬は財団法人ハーモニィセンター所有のポニーを使用した。ハーモニィセンターの専門家と日本獣医生命科学大学の教職員の立ち会いのもとに実施されている。ボランティアは事前に指導を受け，専門家の指示のもと活動を行った。乗馬会ではこの他に，ヤギやウサギ，モルモット，チャボに触れ合うことのできるふれあいコーナーと，お絵かきコーナー，わなげやミニボーリングなどのゲームコーナーが設置されていた。ふれあいコーナーでは担当者の指導のもと，子どもたちがエサやり，膝に乗せる，なでるなどの体験をした。動物の状態に関しては過度の負担にならないよう，飼育担当者及び獣医師が適宜確認した。

馬の絵を描いた子どもの内訳を表 1 に示す。診断名は，乗馬会に参加するにあたり保護者が申告したものを用いた。定型発達児は，障害者の兄弟及び近隣の住民で，診断の申告のないものとした。

調査日時・場所

日本獣医生命科学大学で開催された乗馬会において 150 枚の絵を収集した（2009 年 11 月 29 日，2010 年 5 月 22 日，11 月 3 日，2011 年 5 月 14 日，12 月 18 日，2012 年 5 月 20 日)。子どもの日常の様子，乗馬会での経験の受け止め方について保護者から情報を得るために 2012 年 12 月 15 日の乗馬会では，保護者 6 名にインタビューを実施した。

乗馬体験の内容

乗馬会では，予約乗馬と当日乗馬の 2 つのプログラムが用意されていた。予約乗馬プログラムでは事前に予約をした子どもを対象とし，馬を引くリーダー 1 名と子どもをサポートするサイドウォーカー 2 名，全体を進行するインストラクター 1 名の構成で行われた。乗馬会当日に参加できる当日乗馬では定型発達児のみを対象とし，馬を引くリーダー 1 名と子どもをサポートするサイドウォーカーが必要に応じて 1 ～ 2 名付き，サークル内を一周した。予約乗馬，当日乗馬とも軽乗鞍で引き馬をおこない，騎乗時間は約 10 分であった。

描画手続き

予約乗馬に事前登録した参加者を対象に，研究の趣旨を説明した文書を前もって渡すとともに自宅で事前に「馬と自分」というテーマで描いてきてもらった。乗馬後は同じテーマで会場内のお絵かきコーナーで当日描いてもらうか，帰宅後に描いたものを郵送してもらった。お絵かきコーナーはグラウンド傍の屋外に設けた。どちらも枠の描かれた A4 用紙を使用した。お絵かきコーナーでは色鉛筆，クレヨン，マジックを用意し，子どもが好きな種類・色を選んで描画した。自宅で描いてもらったものも，特に描画道具の指定はしなかった。一回の乗馬会において乗馬前と乗馬後に絵を描く機会があったが，子どもの状態を優先したため，毎回必ず描いたわけではない。今回は事前に自宅で描いてきたものと，当日体験後の絵をまとめて分析した。

保護者への聞き取り

表 1　各対象群の内訳

群	N (男/女)	平均生活年齢	年齢範囲	平均描画枚数	平均参加回数
TD	21 (13/8)	8.4	4～12	2.43	1.4
PDD	19 (17/ 2)	12.1	6～18	3	1.7
MR	12 (7/5)	12.5	8～17	3.75	2.5

TD：定型発達; PDD：自閉症; MR：知的障害、ダウン症他

2012年12月15日の乗馬会でお絵かきコーナーに訪れた24名の保護者のうち6名に以前に参加した乗馬会前後の子どもの様子について個別に聞き取りを行った。

分析手順

馬の絵の中に，乗馬体験を表現したと思われる描写（体験の表現）があるかを確認した。体験の表現とみなしたものは，ヘルメット（子どもが乗馬会で身につけた）や，ムクチや鞍，ゼッケン（目にしたもの，触れたもの），サイドウォーカー（接した人）など乗馬会と関連する具体物の描写の有無である。また，子どもはしばしば自分の描画力を補うために補足説明を書き込むため，当日来ていた馬の名前の記載も描写の一部と見なした。単に「人が馬に乗っている」場合は，一般的な絵か，乗馬体験を反映しているかの判断が困難なため除外した。さらに，同一人物による絵を時系列にそろえ，発達的変化についてPDD，MRの絵の内容を比較検討した。

結果

馬が描かれていた150枚のうち，24枚に名前や具体物が記載されていた。残りの126枚は，馬の絵，及び人が馬に騎乗しているものであったが，今回体験した乗馬会の絵であるかどうかは不明なため分析の対象から除外した。TD群，PDD群，及びMR群において，絵の中に一度でも馬の名前あるいは具体物が認められたものを，体験を描画で表現したと判断した。体験を表現していた人数は，TD群21名中11名，PDD群19名中9名，MR群11名中4名で，χ二乗検定の結果，体験の表現に有意差は認められず（$\chi^2(2)=0.745$, *n.s.*），各群とも同じような比率で乗馬会の体験を表現していた。

描画の発達的変化

次に複数回分の絵がある参加者（PDD8名，MR10名）の絵75枚については，描画の発達的な変化を検討した。以下に変化の例をいくつか示す。知的障害児の11歳から13歳までの描画では，生活年齢より遅れて発達しているが，年齢の上昇とともに絵が具体化していた（図1）。自閉症児の15歳から18歳までの描画では，15歳のときからほとんど絵の変化は確認できないものもあった。これは一度パターンにはまると，その形が変わりにくいという自閉症児の特徴であるといえる。一方で，ゆっくりではあるが自分を中心とした絵から，馬の内面を記述したものへ変化した例があった（図2）。12歳7ヵ月では，馬に乗った自分が描かれており，13歳6ヵ月，14歳1ヵ月のときにはさらに経験が重なり，馬の名前とニンジンの絵が描かれていた（乗馬会では馬に乗ったあと，馬にニンジンをあげることができる）。そして15歳1ヵ月のときの絵には馬の気持ちとして「おいしい」と書かれていた（図2右下）。

馬の名前

馬の名前を記入した例を図3（図1，2も参照）に示す。特定の物に名前をつけて呼ぶということは，具体的な経験と関連付けて表現することである。例えば「ポピンズ」という馬の名前を描くことは，“乗馬会で出会った黒い馬”との体験を表していることになる。特に注目すべき点は，一般的に人への関心が低いと言われる自閉症児が馬の名前を書いていた（図2）ということである。

具体的体験の表現

自閉症児は特に人物の描写が苦手とされるが，中には自分以外の人，ここでは「馬のリーダー」を表現した子どももいた（図4）。

保護者への聞き取り

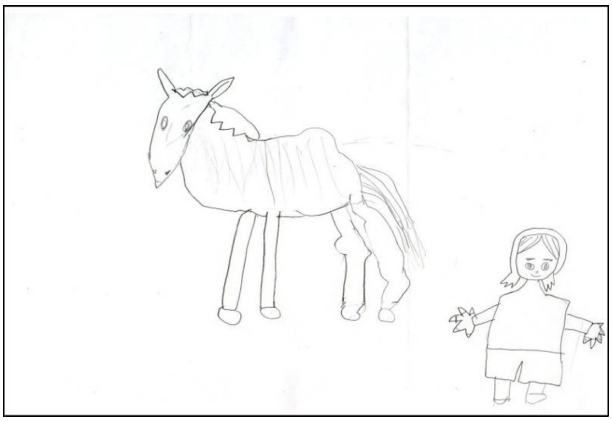
インタビューを行った保護者6名のうち，4名の子どもが絵を描いていた。自閉症児（7歳女）の母親は，「馬以外の動物が苦手だった子どもが，乗馬会に参加してウサギやモルモットなどの動物も平気になった」と回答した。子どもの絵を見ると馬以外に小動物が表現されていた（図5）。自閉症児（11歳男）の母親は，乗馬会を行った会場の最寄り駅に来ると，「馬に乗ったね」という会話をすると回答した。また，大きい動物も怖がらなくなったとの回答が得られた。子どもの絵を見ると，大きな馬に自分が乗っている様子や馬のリーダーが表現されていた（図6）。

考察

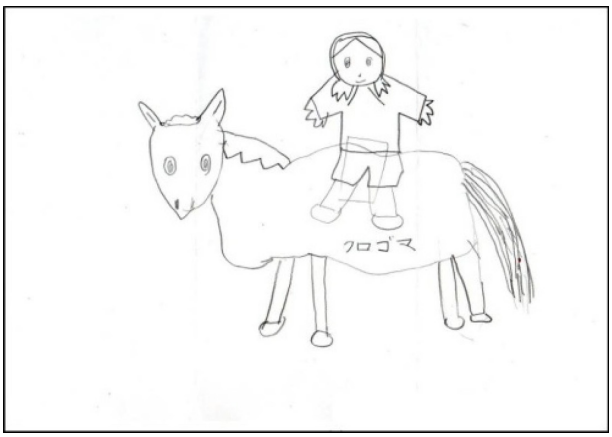
ガードナーの事例報告（Gardner 1980）同様に，当日参加した子どもたちは大学で開催された乗馬会の体験を絵にしていた。その傾向は絵が描けるPDD，MRにも同様に見られ，馬の名前を書く，乗馬体験を表す具体物を描くなどの傾向も観察された。PDDの絵は先行研究でも指摘されているように独特のパターンが見られたものの，絵の場面設定はTDやMRと同じであった。

描画は文字や書き言葉で表現が難しい幼児や障害児の体験や内面を測定する材料となりえると思われる。ガードナーが行った子どもへの聞き取り同様，数は少ないが，母親への聞き取りからも，子どもの絵が乗馬体験をどう捉えているかが反映されていることがうかがえた。

自閉症児の描画の内容は，社会性の発達と相関することが報告されている（Lim and Slaughter 2008）。さらに，自閉症児の人物画は身体図式（body schema）の未熟さ（神園 1998）や空間認識を知覚することの

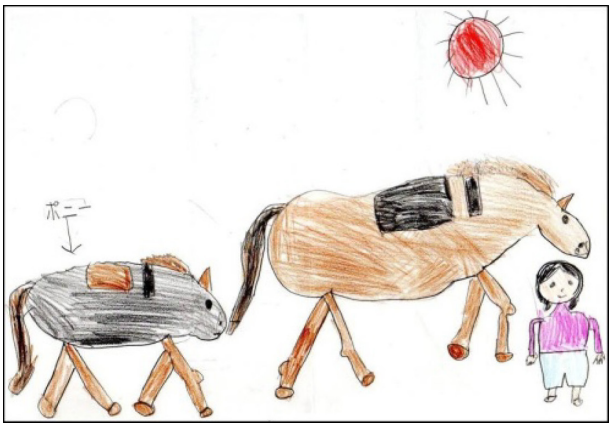


11 歳 3 ヵ月（過去に乗馬経験あり）

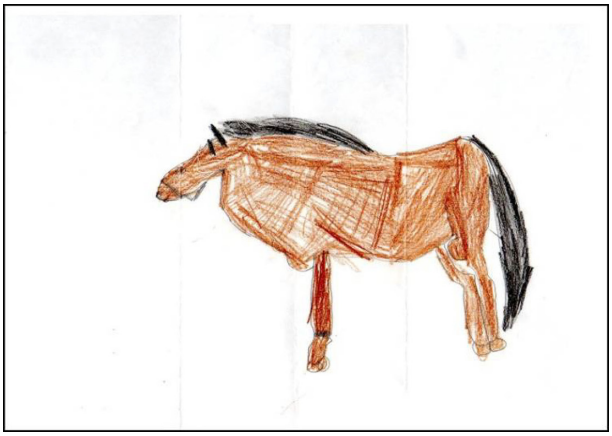


11 歳 8 ヵ月　馬の名前の記載，子どもが騎乗

12 歳 2 ヵ月　馬の描写が詳細になった。ニンジンなどの付属品が描かれている。地面が描かれている。



12 歳 10 ヵ月　馬が 2 頭に，太陽が描かれている。



13 歳 3 ヵ月　馬の形が描写的になった。

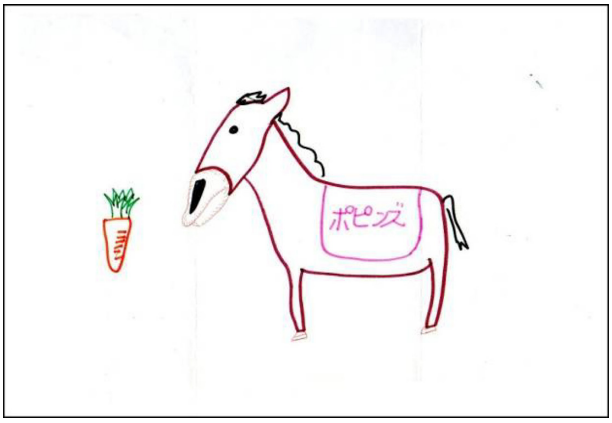
図 1　発達的変化（MR）

困難さ（Arnheim et al 1973）などを反映し，全体的に目や口，手や足など，身体の基本的な部分は描けたとしても，身体全体をバランスよく描くことは難しく，腕や脚の関節，指先などの細部の描写に欠けるものが多いという特徴がある（是枝・東條 2004）。

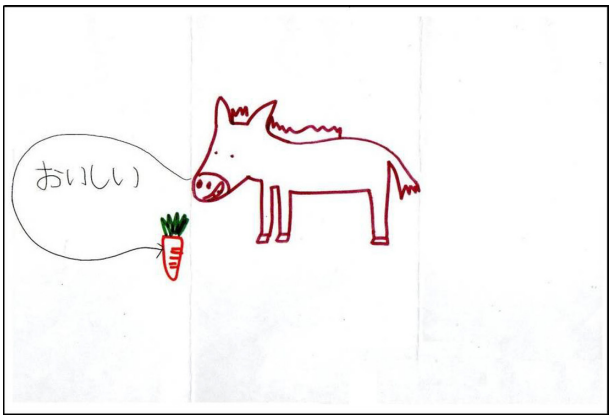
発達による描画の変化についての検討から，TD，MR に関しては年齢に伴い絵が複雑化し，また洗練されていくことがうかがえた。定型発達児は 4 歳から

12 歳 7 ヵ月

13 歳 6 ヵ月



14 歳 1 ヵ月



15 歳 1 ヵ月

図 2　発達的変化（PDD）

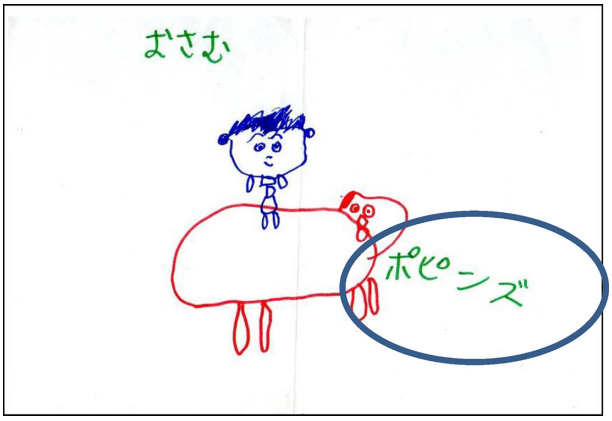


図 3　馬の名前の記入
MR（ダウン症）15 歳 6 ヵ月

図 4　具体的体験の表現（馬のリーダーを描く）
9 歳 4 ヵ月（PDD）

乗馬体験を絵に表現することができていたが，広汎性発達障害児や知的障害児も生活年齢より遅れるものの絵に表現することが可能であった。自閉症児，知的障害児とも絵の完成度は異なるものの，表現している内容は定型発達児と共通していた。特に自閉症児は人との関係においては異質と指摘されているが，馬との関係，馬をとりまく人の役割が描かれており，乗馬体験が PDD の子どもにも同様の影響を与えている可能性が示唆された。

自閉症児の絵の中には，3 年の間に，絵がほとんど

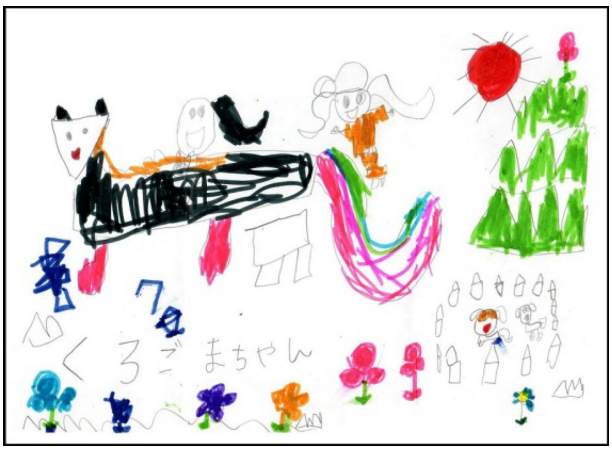


図 5　自閉症児（7 歳女）の絵

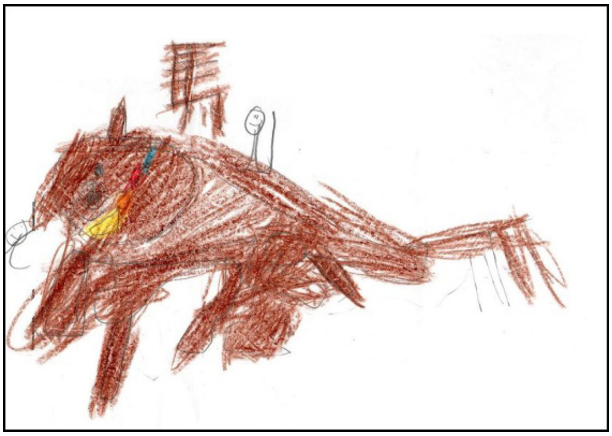


図 6　自閉症児（11 歳男）の絵

変化しなかった子どもがいた。これは，常同的で限定された型に熱中するという自閉症の特徴が描画に関しても当てはまると考えることができる。自閉症児は人物を描くことが苦手ではあるが，馬の手綱を持っている人を描いている絵もあった。また人の気持ちがわからないといわれている自閉症児が，複数回の乗馬を重ね，馬の気持ちを表現できるようになった例もあった（図 2 右下）。これは馬の立場になって気持ちを汲むことができていることを示しており，本人の内面の変化を反映していると思われる。

MR の変化の事例からは，描画能力の発達が生活年齢よりは遅れているものの，年齢の上昇とともに絵が具体化し，その内容は障害による逸脱があるというよりも発達的遅れを示しているようだった。様々な描画研究で指摘されているように，絵は精神年齢によって完成度が決まることが乗馬体験後の絵においても確認できた。PDD の絵では人の描き方に特徴があるなど，先行研究同様の傾向が観察された。さらに発達的変化が乏しいことも特徴としてみられた。この 2 つのグループに関しては，絵の評価方法を別個に考える必要があるだろう。

本研究では 4 年にわたって絵を集めて分析したが，一つの絵だけを取り出して見るのではなく，同じ子どもの 4 年間における変化を見ていくことで発達による影響についても明らかにすることができた。非日常的な乗馬会において経年変化を見ることで，子どもの発達，そして自分と馬との関係の変化を確認することができた。これは，体験を絵にさせることが，動物を介在させた活動，教育，療法の長期的な影響を検討する手段としての可能性を示唆するものでもある。

保護者への聞き取りから，日常場面での子どもの乗馬会に対する反応は絵と関連していることがうかがえた。今後は本研究結果の裏付けを行うためにもより多くの聞き取り調査が必要である。また，保護者のコメントで，「乗馬会に参加したことで，普段あまり外に出たがらない子どもが自ら進んで行きたくなる場所が増えた」，「動物を怖がらなくなった」，「参加を楽しみにしている」などの意見があり，短時間の騎乗ではあるが，子どもに与える影響は大きいことが伺えた。

今後の課題として，絵だけでなく面接，行動観察，保護者への聞き取りなど他の入手可能なデータも併せて評価する必要がある。また，今回の研究では，参加者に負担のかからないように留意して絵を集めたため，障害の種類・程度にばらつきがあった。今後は，より統制された条件下で検討を重ねることが求められる。

本研究は描画を評価尺度として用いるための試験的な試みとして位置づけることができる。今後はより多くの場面で使用できるよう，手続きや評価基準の尺度化を進めて行く必要がある。

謝辞

本研究の実施に際し，絵の提供にご協力いただいた乗馬会参加者の子どもたち，保護者の皆様にお礼申し上げます。

また，本研究の実施に協力してくださいました日本獣医生命科学大学 動物介在活動の会の井澤菜摘様，小暮友香様，メンバーの皆様，ボランティアの皆様，財団法人ハーモニィセンターの方々にも感謝の意を表します。

引用文献

1）Arnheim DD, Auxter D, and Crowe WC. 1973. *Principles and methods of adapted physical education.* St. Louis, C.V. Mosby.

2）Cox MV. 1992. *Children's drawings.* London: Penguin Books.（モリーン・コックス　子安増生（訳）（1999）．子どもの絵と心の発達，有斐閣，東京都）

3）Gardner H. 1980. *Artful scribbles: The significance of*

children's drawings. New York: Basic Books.（H. ガードナー　星三和子（訳）(1996)．子どもの描画―なぐり描きから芸術まで，誠信書房，東京都）
4) 伊澤　都，荻原都奈，的場美芳子，柿沼美紀．2012．小学１年生を対象とした動物介在教育―生活科で犬とのふれあいから学ぶ―．動物介在教育・療法学雑誌，3，1-6.
5) 神園幸郎．1998．自閉症児における姿勢・運動の特性―「ぎこちなさ」の心的背景について―．小児の精神と神経，38，51-64.
6) 是枝喜代治，東條吉邦．2004．自閉症児の身体意識能力の特性―運動模倣と人物画の評価から―．国立特殊教育総合研究所分室一般研究報告書，7，65-70.
7) Kotrschal K and Ortbauer B. 2003. Behavioral effects of the presence of a dog in a classroom. *Anthrozoös*, 16, 147-159.
8) 倉恒弘彦，北田友紀，大川尚子．2011．馬介在療法の科学的検討．畜産の研究，65，15-22.
9) Lim HK, and Slaughter V. 2008. Human figure drawings by children with asperger's syndrome. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38, 988-994.
10) Luquet GH. 1927. *Le dessin enfantin*. Paris: Delachaux et Niestlé.（G.H. リュケ　須賀哲夫（監訳）(1979)．子どもの絵，金子書房，東京都）
11) Matoba M and Kakinuma M. 2009. Changes in children's negative attitudes towards dogs expressed in essays during a humananimal bond (HAB) education program–negative comments decreased as the children became acquainted with the dogs. 日本動物介在教育・療法学雑誌，1，25-28.
12) 荻野省六，窪　龍子，平田智久，福井昭雄，中村美津子．1989．幼児・児童の描画活動について―動物画にみられる表現の変化―．日本保育学会大会研究論文集，42，258-259.
13) Silk AMJ and Thomas GV. 1986. Development and differentiation in children's figure drawings. *British Journal of Psychology*, 77, 399-410.
14) 内山三郎，小原翔太，朝岡将人，山手寛嗣．2012．ホースセラピーにおける唾液アミラーゼ活性の応答．岩手大学教育学部研究年報，71，1-8.
15) Viaua R, Arsenault-Lapierreb G, Fecteaua S, Champagnea N, Walkerc C-D, and Lupienb S. 2010. Effect of service dogs on salivary cortisol secretion in autistic children. *Psychoneuroendocrinology*, 35, 1187-1193.
16) 山形恭子．1999．認知発達理論におけるシンボルとしての絵の理解と産出．金沢法学，41，1-12.

乗馬会に参加した子どもの絵は乗馬体験を反映しているか―定型発達児，自閉症児，知的障害児の比較から考える描画分析の可能性―

柿沼美紀・野中香緒里・野瀬　出

日本獣医生命科学大学　比較発達心理学教室

(平成 25 年 1 月 25 日受付 / 平成 25 年 3 月 4 日受理)

要約：子どもを対象として動物を介在させた活動や教育は増えているが，客観的な評価をまとめた研究は少なく，早急に評価方法の開発が求められている。心理学では言葉や文字での表現が限られている幼児を対象に古くから描画による検査が行われてきた。本研究では，動物介在活動や動物介在療法の対象となる広汎性発達障害児と知的発達障害児の描画を定型発達児のものと比較し，動物を介在させた体験を子どもがどのように捉えているか検討した。日本獣医生命科学大学で定期的に開催されている障害児向けの乗馬会の参加者（4-18 歳）が描いた 150 枚の絵を分析した結果，広汎性発達障害児と知的発達障害児の絵は生活年齢をしたまわるものの，ヘルメット，ムクチ，ゼッケン，鞍など乗馬体験と関連した物を描いたり，騎乗した馬の名前を書く傾向は定型発達児と同じであった。また，複数回参加した対象者の絵には，動物との関係性の変化が表現されていたり，知的発達に伴い絵が具体化している様子などがうかがえた。以上のことから，描画を通して参加者の内面の変化をある程度測定できたと考えられる。今後は馬を介在させた場面での評価尺度としての検討を重ねる必要がある。

キーワード：自閉症児，乗馬体験，描画分析

J. Anim. Edu. Ther. 4: 1-8, 2013
